

「再びルイへ。」から「祭りの場」へ／「祭りの場」から「再びルイへ。」

島村輝

1、「3・11」から「再びルイへ。」

1、「林京子」との二つの出会い…文学者として／地域の隣人として

「林京子」という名に初めて接したのは、一九七五年上半期の芥川賞受賞作として『文藝春秋』誌に掲載された「祭りの場」を読んだときだった。さまざまな詩や小説を手当たり次第に読み漁り、いっばしの批評眼を備えたつもりでいた当時生意気盛りの文系男子に、「文学」に対する見方を根本的に変えなければいけないと感じさせるほどの衝撃を与えてくれたのが、この作品だった。以後この作家の名は「特別な現代日本文学者の一人」として、筆者の脳裏を離れることがなかった。

その後日本近現代文学の研究者となり逗子に転居した後、二〇〇四年「逗子・葉山九条の会」の事務局長としてその設立に携わったとき、賛同者の中に「林京子」の名を見出して、改めて高校生以来のこの方との縁を意識することとなった。文学者「林京子」とともに、地域の運動に参加する隣人としての林京子さんの存在を身近に感ずるようになったのである。

2、地域社会で語った林京子

林氏は、著名な被爆文学の作家であるということ、地域ではほとんど表に出さず、「九条の会」での活動も、賛同の署名を寄せたり、活動資金としてカンパを寄せてくれたりといった局面が主で、特に目立つような振舞いは遠慮されていたように感じた。ただ一度だけ、会の企画の舞台に林氏が立つてくださったことがあった。

時は二〇一〇年五月三日の憲法記念日である。日本の敗戦から

六五周年となったこの年、「逗子・葉山九条の会」も加わる。「二〇一〇年五月三日のちと平和を考えるつどい in 逗子・葉山実行委員会」は「対談 未来へつなぐ平和への想い」と題する公開企画を地元逗子の文化施設である「逗子文化プラザ なぎさホール」を会場として開催した。

筆者が司会進行を担当したこの催しに登壇されたのは、戦争で学問上の同志ともいうべきパートナーを亡くされ、その後「平和遭難会」を立ち上げて反戦活動に参加してこられた地元の郷土史家・黒田康子氏、林氏同様八月九日の長崎で被爆しその後「神奈川県原爆被災者の会」会長などを歴任して、永らく被爆者救済と核兵器廃絶の運動に携わってきた田栗末太氏、そして林氏であった。

この座談の中で、田栗氏は、爆撃のあと五日後、自宅のあった爆心地（松山町一七〇番地）に帰ってみると、町が一面の焼け野原になっており、父が働いていた場所（三菱兵器製作所）のがれきの中を掘っていると、白い骨が見つかった。しかし父も、全く姿の無くなった家にいたはずの母も、どこにも見つからなかった、と語られた。この話を引き取って、林氏は次のように続けられている。

私は今田栗さんのお話を伺って、胸が一杯なんですね。ちよんどうお父様たちが亡くなられた松山町の上の段々畑まで下敷きになった工場から逃げて来て、その段々畑の上から松山町を見下ろしていたんですね。八月九日に。ある大学の先生が、原子爆弾というものは滅菌の思想だっておっしゃったことがあるのですが、その言葉通りの情景が段々畑の下に繰り広げられていた。そこにはいくつかの町があったんですけども、私が被爆か

ら三時間か四時間くらい、山の斜面を逃げて松山町の上に戻ったときには、それらの町は一切無くて、動いてるものは何一つ無い。赤土のグラウンドになっておりました。立っている木もありません。ですからお話をうかがって非常に切ないです。私はそこまでやっと逃げていったんです。(1)

そして「祭りの場」に登場する二人のおばさんと出会い松山町に逃げるが、そこがすっかり焼け野原になっているという情景に遭遇するエピソードが紹介されたあと、林氏は次のような述懐を付け加えている。

そうしましたら、いつしよに逃げてくださいったおばさんが、お一人の方が、もうご自分の家がない、家族も亡くなつてるといふことは一目瞭然ですから、町を見下ろして、「こうなれば弔い合戦だ」と大きな声で仰つたんですね。私はそこまで逃げて来て、自分が生きているということ、外見は傷がないということ、それがとても嬉しかったんです。本当に命一つの大切さをあゝの時はど私は感じたことありません。生きてる喜びを感じている時におばさんが、こうなれば弔い合戦だと叫んだ。その時少女ながら切実に思ったことは、「大人の人们、もう戦争はやめて下さい」、私は本当に願いました。それが八月九日に私が感じた二つのことなんです。自分の命、それから人の命の大切さ、それと骨身にしみた戦争への嫌悪感です。(2)

この公開座談会は、その後実行委員会の手によって文字起こしが

され、手製のパンフレットとして流通することになった。ここで林氏が語られたことを基盤にして、林氏お一人に的をしぼり、その文学的・人間的半生を語った小冊子を出版しようという話が具体化してきたのが、明けて二〇一一年のことであった。

3、『被爆を生きて——作品と生涯を語る』誕生まで

出版元の岩波書店の編集者を交えて、いよいよ企画を具体化しようとしていた、まさにその時に、「3・11」東日本大震災が勃発した。

わたしは電話をかけていました。東京のY編集氏はわたしの小説を読んで、——わたしの仕事は、主に被爆体験を綴ることですが——「一九四五年八月六日以降の永い年月を被爆者が生きるとは、どういうことなのか。それは六日九日の瞬間の体験ではなく、むしろその後の永い年月であるということ、突きつけられるようにも思いました。私小説な色合いが強い『祭りの場』から『トリニティからトリニティへ』をならべて拝読したとき、戦後の、それぞれの時点で被爆という経験がどのような意味をもっていたのか、時の経過のなかで、何が変わり何が変わらなかつたのか。」幾つかの質問を提示してありました。質問は私たち被爆者が話し続けてきた核心をついていました。救われませんでした。思いの丈を話したい。その時でした。いきなり足を払われたような、上下ちぐはぐな強い揺れに襲われました。⁽³⁾

そして以後この小説では、この大地震が引き起こした原子力発電所の事故のもたらした、さらにも取返しつかない事態への、絶望的な思いが書き綴られることになる。

事実もまさにその通りだった。大地震発生の瞬間、林氏は担当編集者と、筆者との間での具体的な聞き取りの日取りや場所、内容について、電話で打ち合わせをしている最中だった。

激しい揺れの中で一旦電話を切り、一月ほど経ってやや落ち着いたところで行われたのが、『被爆を生きて——作品と生涯を語る』岩波ブックレットNo. 813、二〇一一年七月)にまとめられたインタビューである。偶然ながら六年後の現在にも尾を引き続けているこの大災害発生の直後、上海居住、戦争、被爆、在米生活、東海村臨界事故などの体験を踏まえて、奇しくも林氏の現代文明の総体に対する批判の表明という性格をもつインタビューになったのは、聴き手としては得難い貴重なことであった。

4、「再びルイへ。」への構想

幸いこの聞き取り記録はあちこちで好意的な反響を得た。刊行後一年を過ぎた二〇一二年秋、それらの報告を兼ねて、林氏の自宅に伺った折、「この災害と、その後に起きた出来事を見ていると、どうしようもない、という気持ちになります。でも、どうしてもそれを書いておかなければならないという気持ちも起ります。それが小説という形になるかどうか、今のところは自分でもわかりませんが、それでもいろいろなことを考えては書きつけているところなんです」というお話を伺った。これがのちに「再びルイへ。」にまとまっていく作品についての、最初の構想を伺った機会だった。

このころ林は、筆者に語ったのとはほぼ同様の内容を、いくつかのメディアに洩らしている。

被爆は、ほかの戦争体験とは異なると考える。「最も芯に深く放射性物質を吸い込んだ人がたくさんいる」

被爆した友人たちは、がんや白血病を発症し三〇台、四〇代の若さで次々に亡くなった。だが、被爆との因果関係は認められず、原爆症の認定申請は却下されることが多かった。林氏自身も長年、健康や子育てに不安を抱えながら生きてきた。

福島事故後、「内部被ばく」という言葉が公式に使われたのを知り、「隠していたんだ。国に裏切られた」と悔し涙を流した。

核兵器も原発も、同じ核である以上、人間と共存できない。

八月九日にこだわって書き続けてきたが、その思いは変わらな⁽⁴⁾い。

この林の怒り、憤りは、「3・11」直後のインタビューでも語られていた。

今回、「内部被曝」ということが初めて使われましたね。私はそれを聞いた時、涙がワーツとあふれ出しました。知っていたんですね彼らは「内部被曝」の問題を。それを今度の原発事故ではじめて口にした。

被爆者たちは、破れた肉体をつくろいながら今日まで生きてきました。同じ被爆者である私の友人たちの中には、入退院を

繰り返している人もいます。でも、原爆症の認定を受けるために書類を提出しても、原爆との因果関係は認められない、あるいは不明といわれて、却下の連続です。認められないまま死んでいった友だちがたくさんいます。(略) 内部被曝は認められてこなかったんです。闇から闇へ葬られていった友人たち。可哀想でならなかった。⁽⁵⁾

そしてこれらの強い思いは「再びルイヘ。」では、次のように小説化された。

翌一二日、一三日、福島第一原子力発電所の爆発事故。平和利用とはやされて出発した原子力発電は、原子炉の核燃料棒溶解と同時に崩壊をはじめた。最悪の事態です。発電所から二〇キロ以内の居住者は避難指示。大津波の恐怖をうまわる早さで広がったのが放射性物質の危険性。「内部被曝」の問題です。多くの人にとって、耳新しい言葉でしょう。「内部被曝」こそが被爆者たちの六十年数、向き合ってきた核と人、核物質と命の問題、「内部の敵」なのです。⁽⁶⁾

林は、そのプルトニウムの毒性、セシウムの半減期の永さに言及したあと、こう続ける。

「内部被曝」の怖さは、放射性物質が零になる日まで、微弱であっても放射線を放射し続けること。発病するか否かではない。

これでも六日九日の被爆と「内部被曝」は無関係といひ切れるのか。原子力発電所の事故で、「内部被曝」の危険性を隠されなくなった。せつは詰まった「内部被曝」の発言です。爛
圃で壁が抜けて、隣の授業がみえる教室で、死後の世界を質問した綱友の思い詰めた眼、母親に支えられて卒業式に出席した友の、セーラー服からのぞいた細い首。眉間に我が子への想いを残して逝った友人たちの顔が浮かびます。¹⁾

「内部被曝」問題への強い憤りの感情がそのまま旧友たちの不安な死に様に結びついていく書き方の運びに、注目したいと思う。

「再びルイへ。」で多用されるこの「目前の冷徹な現実」の認識と、その現実から一種の「距離」をとることで、それらが重層して脳裏に顕れてイメージを構成するという書法こそ、芥川賞受賞の事実上の文壇デビュー作「祭りの場」から、連作集『ギヤマンビードロ』、『無きが如き』などの作品を経て、最晩年の「再びルイへ。」にまで貫かれる、林京子の小説作法の核心に位置するものではないかと考えられるからである。そこで、次節ではそうした林文学の「原点」ともいべき「祭りの場」の独自性を考え、そこから再度「再びルイへ。」へ考察を進めていきたいと思う。

II、原点としての「祭りの場」

1、「祭りの場」芥川賞選評

「祭りの場」は『群像』一九七五年六月号に掲載され、第七三回芥川賞を受賞、『文藝春秋』九月号に受賞作として掲載された。

同号に掲載された選考委員の選評を見ると、受賞にあたっての、この作品への評価の軸がどのようなものであったのか、知ることができ
る。

高く評価した委員は「このような題材の前には、よく書けているも、書けていないもない」（井上靖）、「今回は際立つてすぐれた作品がなく、素材の持つ力によって、最初から『祭りの場』に票が集まった」（大岡昇平）、「芥川賞にははじめての原爆もので、九委員のうち、七、五票を得たのも当然だ」（舟橋聖一）と、原爆被爆体験という素材の深刻さ、重さと、その表現に注がれた作者の熱意という点を評価していることがわかる。

一方「私には、事実としての感動は重く大きかったが、それが文学の感動にはならなかった」（安岡章太郎）、「（文章の随所に捨てゼリフのような数行があり）その部分の発想が不統一で、戦争体験に十分モトデをかけたかどうか疑わしくなるところがある」（吉行淳之介）といった評に見られるように、表現にあたっての特質が、選考委員の文体感覚にそぐわないため、傷と見られるような傾向も存在した。これらの選評には、「祭りの場」に限らず、「原爆被害」を芸術として評価するにあたっての、困難な問題を考える足掛かりが示されているように思われる。

2、「原爆文学」としての特異性

「原爆文学」として括られる文学は、作者にとつて、なんらかの形での「原爆被爆」のなまなましい体験がなければ書けなかったことはたしかである。しかしそのことは必ずしも「被爆体験至上主義」とでも名付けるべき評価軸を立てることを意味しない。もちろん現

場での直接的被爆体験が、作家にとつて巨大なインパクトをもたらすことは事実であるが、直接に原爆炸裂の現場や、直後の被災地の状況を見聞したわけではなくとも、その既成表現を絶するようなありさまについての想像力が、優れた文学を生み出すということは、決して不思議なことではない。逆の見方をすれば、被爆体験を文章にしたからといって、それが、その素材の深刻さゆえに、直ちに文学作品として高い価値を持つとも、いえないはずである。その部分については、それは最終的には「原爆投下」「炸裂と後遭被害」といった出来事についての、作者の文学的感受性と表現力に関わってくることになる。その点で、先に記した芥川賞選考委員たちの評言は、そうした既存の評価軸の構制の中での評価だったといふことができるだろう。

しかし林京子の「祭りの場」において採られた方法は、「被爆し、目撃・体験した事実を後世のために書き残す」ことを主眼としたと、大枠として評価できる大田洋子や原民喜の場合とも、また作者本人は直接原爆の炸裂現場に立ち会わなかったものの、凶像という強烈なりアリズムでその実相に迫ろうとした「原爆の凶」の丸木位里・俊子夫妻の態度とも違うものだったのではないだろうか。その方法はその時点までの「原爆文学」のどの作品とも異なっている部分がある。芥川賞の選評の言葉が、どれも「祭りの場」という特異な小説の本質的な部分を、やや外れた批評となつていているという印象を受けるのは、この作品のそうした性格が作用しているのではないかと思われるのである。

原爆被爆体験は無論特別な出来事であり、それが文学にとつても特別な素材となることは間違いない。同時代的に言えば、ナチス・

ドイツ支配下のホロコーストと同じく、日常の判断力の及ばない、きわめて特別な極限状態が現出している状況である。それは反復や一般化の許されない「一回性」において成り立っているという点で、文学の素材としての特別なメリットと、それとはうらはらのデメリットを含んだ事態であるといえるだろう。

小説という表現形態は、反復や一般化の許されない「一回性」を担保した素材の採用においてのみ成り立つ、というわけではない。一例として、樋口一葉「十三夜」を考えてみれば、そのことはよく理解できるはずである。明治維新の激動から三十年近くを経過した時代を背景に、何処にでもよくある、ひと晩の家庭の出来事、夫との不仲から実家に相談に来た女性が、両親の意見を聞き入れて婚家に戻る。その途中に幼馴染の車夫の没落した現状を知るといふ、あらずじにまとめてしまえば、いわばどこにでもゴロゴロ転がっているような出来事が素材となつていたのである。

しかしだから「たいしたことはない」とは言えない。「十三夜」にはそのどこにでもあるような光景の配置を用いながら「この場面は、まさにこのようにしかありえない」というような必然に貫かれている。そこにはその場面に集約される、すべての登場人物たちの考え方、生活歴、そしてそうしたものを作り上げている、近代化途上の日本の矛盾の全てが、不可逆的な時の経過を経験しなければならぬ人間の哀感とともに描き出されている。だから「十三夜」は名作として今日まで高い評価を受けつつ読み続けられているのである。

3、「祭りの場」の「語り」の位置

被爆体験を素材とする文学の場合は、これとは逆に「一回性」

の重みを強調すればするほど、その出来事の背後に積み重ねられた日常の積み重ねを読者に感得させる力が求められると言えるだろう。そのような観点からすれば、「祭りの場」についても、「原爆」という極限状況の、特別な経験を扱っているからすごい」と評価するだけでは、この作品の表現の特質を、公平に評価することにはならないのではないだろうか。

もちろん「祭りの場」の語りにあっても、「被爆の実相」を徹底したリアリズムで描くこと、すなわち目前の地獄のような風景を、異臭までをも感覚させる臨場感あふれる描写で再現するような技法は、さまざまに形使われている。それはそのこと自体として高くも評価できるが、だからといってそうした技法の使用が、「事実そのものを描く」ということを目的にしているわけではない。むしろこの小説を読んでいて感じるのは「地の文の語り主体が、いつどこにいて、なにを見て、なにを考えているのか」が、一読して判りにくいということである。作品内に定位される時間と視点についての指標がわかりやすく示されているというわけではないため、この小説のあらすじを纏めるのは難しい。またそれをたどってみても、この小説がよくわかった、とはいえない感じが残るはずである。仮に記してみよう。

「学徒動員されていた女学生が被爆し、避難の途中で行きあつた見知らぬおばさんに助けられてその街にいつてみたら街は壊滅していた。同郷の医学生に助けられて会話を交わしたが、その人は死んでしまった。そのことを戦後三〇年経ったところで振り返ってまとめた」。しかしこれでは「祭りの場」についてなにも言っていないのに等しいのではなからうか。「祭りの場」とは、実はこうした素材

性に頼つた「あらすじ」に還元することができない、特異な語りの技法が効果を發揮している小説だとみることができる。

「祭りの場」の冒頭は「昭和二〇年八月九日」の日付を持つ「降伏勧告状」の引用から始まる。その引用に続くのは「私は長崎の被爆者だから顔みしりの人たちの、生命の代償による、一層の効力が計算された勧告書を、平静に読むことはできない」という一節である。両者の間には、それを繋ぐなんの説明もない。ここにおいて、この小説の特異な構造の大枠は示されているといつてよい。発表当時三〇年以前の、少女としての「被爆体験」と、成長してその出来事と一定の距離をとることができるようになった「いま」の「語り手」の感覚や心情とが、自在に組み合わされ、綴られていくのである。

それは先に「あらすじ」にまとめられるような「小説」の形態をとつているが、実のところ心象風景を組み合わせ、それを遠近法的に配置し、読み手とともに被爆の現実と「いま」（被爆三〇年後）を往還しながら、その間の出来事をモザイクのように嵌め込み、散りばめていく、幻想小説、あるいは「詩」のような書き方が採用されているのである。だから読み手としては、その時の「語り手」の立ち位置について、よくよく注意深く検討しながら読まないと、幻惑されていくことになっていく。

4. 読み手の注意を喚起する「語り」

一四歳の少女の見た風景が、その直後に三〇年後の批評的ことばにつながってくる、というわけである。一つの場面と前の場面とのつながりは、わかりにくい場合もある。同郷の医学生・稲富と少

女であつた語り手の、極限状況での男女の語らいが描かれている部分もある。ごくあつさりと言われているが、その出来事は印象深い。少女の瀕死の状況、稲富の死、これだけで一つの小説が書けるほどの題材だといえるが、この作品はそれをごくあつかりと片付ける。そのギャップが、読み手に深々とした余韻をもたらすのである。「祭りの場」とは、そういう普通の小説ならば用いない、見方次第では芥川賞受賞時のいくつかの選評にもあつたように「稚拙」とも感じられるような技法が随所に使われている、不思議な小説なのである。講談社文芸文庫の『祭りの場』に、表題作とともに収録されている「二人の墓標」「曇り日の行進」は、基本的には「あらずじ」をその通りになぞつていける小説であり、視点がはっきりしている。特に後者は、被爆者の日常の心情に即してわたりやすいといえ「ばわかりやすい。それに比して「祭りの場」はたしかにわかりにくい、だがその「文学」としての潜勢力という面から見ると、他の二作とは比較にならないほど重い読後感を与えるのが「祭りの場」であることは、万人が認めるであろう。それこそがこの作品の特異な個性なのである。題材からいえば「原爆」「上海」「家庭」のすべてを経巡りながら、「祭りの場」は三〇年間の時間を、写真帳を繰るようにして提示している小説であるといえる。そしてこのまったく独特な、事実上の文壇デビュー作から三十数年を隔て、「3・11」後の状況の中で「再びルイへ。」を書こうと思ひ立つたとき、その方法が作者に想起されたのは、事態のもたらした必然だったというべきかもしれない。

Ⅲ、「祭りの場」から「再びルイへ。」

1、日本近代史上の特異点と、特異な資質を持つ文学者

植民地主義の時代の上海「租界」体験、長崎での「被爆」体験、家庭の事情から居住することになった、原爆投下国「アメリカ生活」体験と、林の経歴をたどつてみると、まことに特異な、日本近代の歴史を象徴するような場面に立ち会つてきたことを、改めて感じる。もちろんこれが彼女だけにあてはまる運命的な必然だったというつもりはないが、だからといつてこうした偶然的局面にたびたび遭遇すれば、誰もが林京子のような表現を獲得できただろうというつもりもさらさらない。このような「偶然」の連続を、あたかも「必然」であるように綴つたことこそが、林京子が真正の「文学者」であつた証であるとしてもいいように思う。

林京子の文学は、「私小説」、「本格フィクション」、「報告文学」など、多様なジャンルにわたる方法が採用されているようにも読める。だが深く読み進めていつてみると、彼女の作品それぞれは、こうしたジャンル分けには必ずしも馴染まない、複合的な性格を持つており、新たな性格付けが必要ではないかと思われてくる。その核心にあるのが、「客観性」と「距離感」の複合的コントラストともいふべきものである。正確・精密な描写の直後に、冷徹・皮肉な批評性に満ちた感想が挟まれる。そのことによつて、場所・人物が「異化」されて、映写された幻燈画のような心象風景が現れてくる。どのようにジャンル分けされる作品であっても、そのような一節は随所に現れ、それが林京子文学独特の、不思議な雰囲気醸し出ししている。「祭りの場」でいえば、出陣する学徒たちの壮行会となつ

ている踊りの場面などが、まさにそれであろう。宮澤賢治の「なめとこ山の熊」を彷彿とさせるような、フオークローに登場する「魂送り」の場、それがやがて惨劇の場に、重ねられていく。先に触れた、稲富と少女時代の語り手のエピソードの書き方なども、同様といえる。

これは本人が意識してそう書くというより、書き綴っていくとそうなってしまうということかもしれない。生前の林さんに伺ったこともあるが、かならずしも自作の方法を自覚しているとは思えないようなところがあった。「そのように読み方を解説してもらって、ああ自分はそういうことを言おうとしていたんだな、と思うところがある」といわれたことが何度かある。それが本心であったか韜晦であったか、今となつては確かめるすべもないが、筆者としてはその言葉が発されたときの林さんの表情が、強く印象に残っている。

2、対象との切断と合一

スクリーンの向うに映し出されるような見え方は、臨死体験のような場面で起こる、意識の変性状態がもたらす場合がある。離人症、幽体離脱などと称される現象もそれと同様の心理的構制によるとされる。見えているのだが、その場からは離れている、ベールが一枚かかった向うの出来事のように感じられる、そういう現象である。眼前に起きている出来事が、あまりにも苛烈である場合も、心理的な防衛機能としてそうした現象が起きることがある。出来事は隅々まで見えているのだが、その現実感が、そのまま幻のように受け取られるような心理状態である。

イメージはクリアだが、幻惑感がもたらされるといような、こ

うした内的経験を文学としての確に表現することは、しかしやはり特別な天性の持ち主でなければできないことである。日本近代文学史上、そうした天性が感じとれる作家としては、宮澤賢治や志賀直哉がその代表といえるだろう。異化の方法によって、ありありと印象づけられる細部の描写や、独特の小道具類の使用をつうじて、幻想的ともいえる場面を作り出し、見ている風景と書いている自分をいったん切り離してしまう。これが林京子の方法であり、独特の文学の力を発揮しているようになっているといえるのではないだろうか。時間・空間・対象と、記述の主体との距離感こそがその秘密である。

3、「再びルイへ。」の対象と方法

「祭りの場」において、早くも最も典型的な現れ方をしていたこの方法は、「再びルイへ。」でふたたびはつきりとしたかたちで採用されている。人類史に記録される、長崎の被爆体験を素材の原点としたデビュー作から一回りして、もう一度「3・11」東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故という人類史的出来事に遭遇した作者が、絶望の内から、どこに出ているのかということ突き詰めて考えた作品である。

原爆投下という人類史上の愚行の被害を原点として出発した作者は、そこから立ち直り生きていく希望として「信じてきた確かなものの、崩壊」の不安を感じるようになる。

四〇歳を越えた辺りから、わたしは迷うことが多くなりまし
た。四〇は不惑の年。人の性は善で、善なるが故に不惑の年を

迎えた人間は「道理を知って迷わない」のだそうです。道理とは、人として行うべき道。深く深く考えをつめていけば、命を幹にして思考すること。^⑤

そう信じていた「わたし」は、しかしやがて「人の性は善ではないのではないか」という疑問にとらわれることになる。それに拍車をかけたのが東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故だった。そして先に引用した、政府からの「内部被曝」への言及に接する。

ルイ。あなたは電話でいいましたね。ちよつといい言葉があるの、「いかにせよ、人生はよし。人生は肯定すると共に、生そのものを愛するものだ。」八〇歳のゲーテの言葉よ。＼

わたしには出来ない。わたしの精神はなえてしまいました。

もうどうでもいい。盟友であるW女史にわたしは宣言して、三月一日からの現実を切り捨てました。^⑥

それまで数々の悲惨な現実には直面しながら、それを「人の性は善」「人生を肯定する」という先人の言葉を支えにして乗り越えてきた「わたし」は、これまでのそうした方法でこの困難を乗り越えることができないと感じるまでの絶望に陥ってしまうことになった。その後小説では、「三・一一」後に次々に繰り広げられた、理不尽な言葉や施策が、いかに「わたし」を苦しめるのか、それがこれまでの「被爆者」「被爆作家」としての人生を、いかに全面的に否定するものとして受け止められることとなったかが、苦しいまでのタツチ

で、しかもモザイクのように綴られていくのである。それは言葉と生業とし、言葉によって立つ作家・文学者として、あまりにも絶望的であり、目前の事実として即時的に受けとめ、記述することができないほどのことであつたらう。その点では「被爆体験」に匹敵するような、精神的生存の危機であつたともいえる。一見すると記述の乱れとも見られるような書き方は、「祭りの場」で採用された、対象への距離をとるという方法と同様のものである。それがこの時の、大いなる危機に直面していた作者にとつての必然であつたことは、十分に理解されるであらう。

その大いなる絶望から立ち直るきっかけを与えてくれたのは、辛辣とも感じられるような友人の言葉だった。＼笑つちやいました。原爆の次は原発ですか。余裕ですね。あなたはいつも正しい。＼

相手の電話番号をプッシュする指が震えるほど立腹し、興奮するうちに、「わたし」は自分のこれまでの立ち位置の滑稽さに気付くことになる。

△子が笑っているのは、原子爆弾の次は原発ですか、とあるわたしのこと。裸で人前に立っている自分自身の滑稽さに気が付いていない、わたしのこと。＼いつも正しい＼わたしは、よい子のつもりでした。

笑いがこみ上げてきました。⁽¹⁰⁾

「どれほど悲惨なことでも、人は笑うことができる」。この認識が、作品末尾に記された二〇一二年七月一六日、代々木公園園脱原発集会への参加の場面に、直接結晶していくことになった。

ルイ。大震災から引ずってきた迷いも、まどわされる揺れも
終わりです。浦上の丘でもらった命一つの謙虚なわたしに還つ
て、代々木から新しい出発です。(11)

「命一つ」とは、冒頭近くに引用した、公開座談会での林の発言にも登場したことばであり、そこに還ることは「祭りの場」の原点に戻ることに結びついている。そして「再びルイへ。」は、かつて発されたルイの質問に、反問する形で、次のように結ばれる。「ルイ、質問があります。あなたはあなたの人生を肯定しますか」。

4. 「ルイ」とは誰か？

この小説が『群像』に掲載された直後、大江健三郎はエッセイ「なかつたことにはさせない」(『東京新聞』二〇一三年三月二日)で、林さんの先の言葉を引用し、「広島、長崎での経験につないで、福島をみつめつつ、もう一度放射性物質で子供らを殺させはしない、という意志に立つ希望を、私は林さんの声のまま自分のうちにしつかり取り入れます」と記している。そしてやがて大江は『晩年様式集』を書き上げることになった。

林からのこの問いかけは、絶望からの立ち直りに向けての大きな励ましとして、大江のみならず、多くの読者の共感と支持を呼びおこすことになった。それは日本国内ばかりのことではない。中国でも権威ある文学研究誌『世界文学』二〇一四年第一号(二月刊行)に、この小説と、インタビュー『被爆を生きて』が、北京日本

学研究センター教授・秦剛氏の解説とともに全文翻訳掲載され、翌号にはその反響が紹介されることもなった。

林氏は、その後原爆や原発事故などに関わるエッセーなどの発表を続けていたが、二〇一七年二月一九日に永眠された。文壇的小説家としては「祭りの場」ではじまり、「再びルイへ。」で完結する作家人生を送ったことになる。講談社文芸文庫版『谷間 再びルイへ。』の「あとがき」には

お付き合いくださった読者のみなさま、ありがとうございます。読んでくださる人がいる。救いでした。皆さまの明日が平和でありますように。

原爆小説といわれる私の作品を今日まで守り、育ててくださった編集者のみなさま、お世話になったみなさまに深く頭をさげます。

お逢いできて私は幸せでした。(12)

と記されている。「二〇一六年 夏の終りに。」と付されているこの一節を、林氏が「お別れ」を予感して書いたものかどうか。ただ今となつてはそれがそう読めてしまうことは事実であろう。

「祭りの場」と「再びルイへ。」。両作品の関連は強く、文学者・林京子の本領が発揮された小説といえる。原爆を巡って、また大災害を巡って、なまなましく惨い話はあるが、そこからもたらされる極限的「離人感」までを表現できた作品は少ない。どの小説家でもそう書けるというわけではない。

極限の絶望的状况のなかで人間はどうするか。何を考えの抛り

所にして、どこを原点にして生きていけばいいのか。つきつめればどうにもならない、あとは死ぬか気が狂うかというときに、どうすれば生きていけるというのか。その場合の対象との距離の取り方は、どのようなものであるべきなのか。「祭りの場」から「再びルイへ」、そして「再びルイへ。」から「祭りの場」へという林京子の作品群のループは、「原爆文学」としてばかりでなく、人類が抱き続けてきた、そのような普遍的な問いへの、一人の強靱な文学者の実践的回答となっている。

手紙の宛名となつている「ルイ」については、モデルとなる友人があると、生前の林さんから伺ったことがあるが、小説であるからには、必ずしもその人物に拘泥する必要はなからう。「特定の友人を指すだけではなく、『人類』の『類(るい)』を含意する『人間』私たち』に向けた言葉でもあるのではないか」⁽¹³⁾という、黒古一夫氏の指摘には共感できる。

実際には選択の余地のないような厳しさのなかから、世を去るその時まで、凜として林京子が示してくれたことは、隣国の水爆実験と、それに対する過剰なまでの威嚇のエスカレーションの狭間で、未来の展望を見出しがたい状況にある今日の私たちに対する、かすかでも確かな、希望の道筋だったのではないだろうか。

注

- 1 『対談 未来へつなぐ平和への願い』 逗子・葉山九条の会、二〇一〇年。
- 2 1に同じ。強調は本論文筆者による。以下同様。
- 3 林京子『谷間 再びルイへ』講談社文芸文庫、二〇一六年二月、

P.223°

4 『神戸新聞』二〇一二年八月二日「被爆と被ばく」 福島と核の

痛み共有」、p.9°

5 林京子『被爆を生きて 作品と生涯を語る』岩波ブックレットNo.813、

二〇一一年七月、pp.43-44°

6 3に同じ、p.227°

7 3に同じ、p.228°

8 3に同じ、p.212°

9 3に同じ、pp.217-218°

10 3に同じ、pp.234-235°

11 3に同じ、pp.244-245°

12 3に同じ、pp.250-251°

13 黒古一夫「ヒロシマ・ナガサキ、そしてフクシマ」3 既出書「解説」、p.260°